

報告 2：奥田英信（一橋大学）

「カンボジア商業銀行の経営効率性：決定要因と政策的意味」

カンボジアの銀行部門は 200 年代後半から好調なマクロ経済情勢に支えられて、急激に規模を拡大してきた。しかしながらその一方で、小規模銀行の乱立によるオーバーストックの懸念や、ドル化経済の下で中央銀行の最後の貸し手機能に制約があるため銀行が過剰な流動性を保有していることの非効率性など問題点も数多く指摘されている。

本稿では、カンボジア国家銀行が発刊する *Annual Supervisory Report* から情報が得られる商業銀行 35 行について、2012 年から 2015 年の 4 年間のアンバランスド・パネルデータデータを作成し、その経営特性の計量的な分析を試みた。分析結果によると、(1)カンボジアでは銀行間で非常に大きな効率性の格差が観察されること、(2)外資系銀行と比較して地場銀行の効率が低いこと、(4)大規模化と経営多角化は効率性を高めること、(5)地方への支店網の拡大は効率性を低下させること、(6)海外資金の調達は効率性に影響を与えていないことが分かった。

これらの観察結果は次のような政策の必要性を示唆を意味している。第 1 に、銀行の規模を拡大し経営の多角化を図ることが必要だという点である。第 2 に、地方支店の展開は銀行経営を悪化させており、国内資金動員を促進する観点からは、支店展開に対して何らかの支援政策が必要であるという点である。第 3 に、銀行が過剰な流動性を保持していることが、非効率性の大きな原因となっており、ドル化経済の下で中央銀行の最後の貸し手機能を回復する何らかの政策を実施することが強く求められるという点である。